

自己希望ボランティアについて

客員教授 東小川 昌夫

教員を目指す教育学部等の学生にとっては、学校現場で教育活動の支援をしながら、実践を通して児童生徒への接し方や教員の業務内容を学ぶ機会として「ボランティア活動」は貴重な体験の場となっている。さらに、教育実習の前後に、実習期間では学べないような現場での体験は、教員としての資質を伸長させる上でも絶好の機会である。

全学教職センターが取り扱う「教育支援ボランティア活動」は、年々参加学生数が増加し、活動内容も多岐にわたっている。「水戸市学校支援活動」は、いわゆる“求人”側の学校所在地が学生の居住地にも近く、取り組みやすい活動内容でもある。また、「県内教育支援ボランティア活動」は、学校に限らず、教育行政や教育関係諸団体からの募集も見られ、学生に多様な体験の場をもたらしている。活動内容の詳細は、本報告書の「教育支援ボランティア活動」を参照いただくとして、今年度、活動希望が増えた「自己希望ボランティア」の現状と課題についてまとめる。

「自己希望ボランティア」とは、学校等からのボランティアの求め“求人”に応じて活動するものではなく、学生の出身小中学校や高等学校に“求職”し、ボランティア活動の内容等を依頼して体験するものである。例えば、自宅に近い小中学校や出身高等学校での学習支援ボランティア活動や保健室経営支援等があげられる。まれに、在校時の担任や教科担当の教師がまだ出身校に勤務している場合もあり、受け入れが円滑に進む場合が多い。

「自己希望ボランティア」の抱える課題についてまとめる。

○ 依頼を受ける学校の関わり方

多くの学校の場合、「学生であっても、一人でも教室に多くいてくれて支援してくれるのは助かる」という返答が多い。しかし、一部の学校には、教員の働き方の見直しからか、教育活動に密接に関係しない業務内容と捉えられ、担当者の許諾が難しく、受け入れが思うように進まない場合も見られる。「現在の児童生徒に正対し、本来の指導をやり遂げるのが本務」と言えばそれまでであるが、後輩を育て「教育の継続と向上」を求めることも、学校現場としては大切な要素はずである。「子供と向き合う時間を大切に」という考え方を最重要視するとともに、教育の魅力に触れされることにより、より多くの後輩教員を育てるという観点から「自己希望ボランティア」活動の存在そのものを周知させ、当該校への依頼を丁寧にとりおこなう必要がある。

○ 学生の活動希望動機

教育実習で体験できなかった、「学校や児童生徒の日常に接したい」という学生の想いは十分理解できる。短期間の教育実習では、指導案作成や実習簿のまとめ等に多くの時間を費やし、児童生徒とのふれあいや教師の実務の実態理解に時間をかけることが難しい現況である。出身校や県内居住地から近い学校を選択するのは、利便性という観点からは好都合であるが、明確な活動理由もなく活動に参加しようとする学生が見られるのも否めない。

教員採用試験の志願書裏面には「ボランティア活動の履歴」を記入する欄が設けてある。その欄を適切な表現で文字を埋めたいという思いも理解できるが、いざ学校に出向いて「なぜ、ボランティア活動を本校でしたいのですか」という活動の根本に関わる質問には、いつどのような形で問われても、明確に答えられる準備が望まれる。